

第 20 回企画展

山口吉彦コレクション

おと・いろ・かたちー南米から日本へー

(2020 年 9 月 28 日～11 月 30 日)



京都産業大学ギャラリー

ごあいさつ

山形県鶴岡市出身の文化人類学研究者 山口吉彦氏はかつて南米アマゾンに赴き、そこに住む人々と交流をしました。その間に収集された資料は2万点にも及びます。これらの資料は、現地の生活が大きく変化しつつある昨今、非常に貴重なものでいえるでしょう。本企画では、アマゾンをはじめ、南米各地で収集された貴重を中心に紹介します。

また今回の企画展は京都外国語大学国際文化資料館と連携して開催いたします。京都に在る大学ミュージアム2館で南米に関する「小原豊雲コレクション」「山口吉彦コレクション」という二つの貴重資料を公開できることは喜びに堪えません。この機会にそれぞれの持つ特色を是非ご覧ください。

民族資料には時代や場所を超え、普遍性を持つものがあります。遠く離れた南米・アマゾンと東アジア・日本との共通項や差異を見出し、比較を行うことで自国・他国の文化を見つめる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本企画展を開催するにあたり、ご協力いただいた山口吉彦氏をはじめ、関係者各位に、厚くお礼申し上げます。

京都産業大学ギャラリー

[第20回企画展 展示資料一覧]

番号	資 料 名	員数	種類	地域	民族	画像	備 考
1	踊り子の衣装 上着	1	衣装	ペルー(クスコ)			・インティライミ(冬至)の衣装
2	踊り子の衣装 スカート	1	衣装	ペルー(クスコ)			・インティライミ(冬至)の衣装
3	ボア(ヘビ)の皮	1	皮	ブラジル			
4	ボア(ヘビ)肋骨の ネックレス	1	アクセサリ	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	テンベ族 (TEMBE)		
5	うなり板 (ズニドール)	1	楽器	ブラジル シンゲー川 (XINGU BRASIL)	メヒナコ族 (MEHINACO)		・音が精霊を表現 するとも、精霊を呼 ぶ音ともいわれる
6	うなり板 (ズニドール)	1	楽器	ブラジル ミナスジェライス 州 (MG BRASIL)	メヒナコ族 (MEHINACO)		
7	骨の笛	1	楽器	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	ワイワイ族 (WAIWAI)		
8	タンボール	1	楽器	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	テンベ族 (TEMBE)		
9	竹製鼓	1	楽器	ブラジル マラニョン州 (MA BRASIL)	カネラ族 (CANELA)		・動物の毛皮が 張ってある
10	角笛	1	楽器	ブラジル マラニョン州 (MA BRASIL)	カネラ族 (CANELA)		・鷹の羽が4枚つい ている
11	ヘコヘコ	1	楽器	ブラジル			・グィロの一種

番号	資 料 名	員数	種類	地域	民族	画像	備 考
12	ビリンバウ	1	楽器	ブラジル			・弓の形状である ・共鳴器にヒョウタンを用いる ・カポエイラの楽器である ・右手にカシシと細い棒を持つ
13	カシシ	2	楽器	ブラジル			・アフリカ発祥の楽器である ・カポエイラの際はビリンバウと共に演奏する
14	豆シェーカー	1	楽器	ペルー			・シェーカー・パカイ
15	豆シェーカー	1	楽器	ペルー			・モダマ、Entada
16	鼻笛	1	楽器	フィリピン	イゴロット族 (the Igorots)		・鼻で吹く
17	タルカ	1	楽器	ボリビア			
18	オカリナ	1	楽器	グアテマラ			・裏側に歌口がある ・太陽がモチーフ
19	マラカス	1	楽器	ブラジル	カネラ族 (CANELA)		
20	マラカス	1	楽器	ブラジル アマゾナス州 (AMA BRASIL)	ワイワイ族 (WAIWAI)		・球の部分が木の実である
21	マラカス	1	楽器	ブラジル	ワイワイ族 (WAIWAI)		・編物
22	マラカス	2	楽器	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	チリオ族 (TIRIYO)		・編物
23	マラカス	1	楽器	ペルー			

番号	資 料 名	員数	種類	地域	民族	画像	備 考
24	マラカス	1	楽器	グアテマラ			
25	アンデスサックス	1	楽器	アンデス			・竹サックス
26	サンポーニャ	1	楽器	アンデス (ペルー・ボリビア)			・ペルー、ボリビア の高地で使われる
27	キハーダ	1	楽器	ペルー			・ロバの顎の骨
28	チャランゴ	1	楽器	ボリビア			・アルマジロが用い られている
29	ゲンプリ	1	楽器	モロッコ			・リクガメを使用
30	亀の甲羅の弦楽器	1	楽器	モロッコ			
31	ラトル	1	楽器	北米			・亀甲、バックスキン(鹿皮)、ビーバー ファー、コヨーテの 脚、ワイルドター キーの羽からなる ・シャーマンが使う
32	くるぶし飾り	1	アクセサリー	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	カラパロ族 (KALAPALO)		・木の実が用いら れている
33	クビワペッカリーの ネックレス	1	アクセサリー	ブラジル マラニョン州 (MARANHÃO BRASIL)	グアジャジャラ族 (GUAJAJARA)		・トップに牙を使用 している
34	ネックレス	1	アクセサリー	ブラジル マラニョン州 (MA BRASIL)	ウルブ族 (URUBU)		・羽と木の実からな る
35	頭飾り	1	アクセサリー	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	シクリン族 (XICRIN族)		・ヤシの葉を用いて いる ・日常の装飾品

番号	資 料 名	員数	種類	地域	民族	画像	備 考
36	ネックレス	1	アクセサリー	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	ワイワイ族 (WAIWAI)		・ビーズ飾り
37	アロワナ柄の ネックレス	1	アクセサリー	ブラジル ゴイアス州 (GO BRASIL)	カラジャ族 (KARAJA)		・アロワナ(魚)の 模様が表現されて いる
38	ヘビの背骨の ネックレス	1	アクセサリー	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	ムンドウルク族 (MUNDURUKU)		
39	ジャガーの牙の ネックレス	1	アクセサリー	ブラジル パラー州 (PA BRASIL)	テンベ族 (TEMBE)		・ジャガーの牙とヘ ビの背骨からなる
40	フライパン型のカゴ	1	道具	ブラジル	カネラ族 (CANELA)		
41	家型のカゴ	1	道具	ブラジル	カネラ族 (CANELA)		
42	ハタキ	1	道具	ブラジル アマゾナス州 (AM BRASIL)	マウエス族 (MAUES族)		・サルの尾からなる
43	ホウキ	1	道具	ブラジル マラニョン州 (MA BRASIL)	カネラ族 (CANELA)		
44	ホウキ	1	道具	ブラジル トカンティンス州 (TO BRASIL)	シェレンテ族 (XERENTE)		
45	毛バタキ	1	道具	ブラジル マラニョン州 (MA BRASIL)	カネラ族 (CANELA)		・レア(アメリカダ チョウ)羽根が用い られている





山口吉彦コレクション

山口吉彦コレクションは山形県鶴岡市出身の山口吉彦氏が長い年月をかけて収集した民族資料である。特に南米アマゾンの資料は世界でも有数のコレクションといえよう。

山口氏はアマゾン奥地で生活するインディオの集落を長年に渡って調査し、物々交換等によって動物や昆虫、生活用具といった2万点にもものぼる資料を収集してきた。コレクションの大半は1970年代から80年代にかけて収集されたものであり、日本が1980年にワシントン条約に加盟する以前の資料である。近年、アマゾンの急速な開発により、先住民の生活様式は大きく変化し、生態系にも大きな影響を受けている。このコレクションは現在では入手困難な、歴史的価値のある貴重な文化資源である。

山形県のアマゾン民族館は2014年に閉館したが、2019年に一般社団法人アマゾン資料館が立ち上げられ、その資料を管理・保存している。

山口吉彦氏

1942 年山形県鶴岡市生まれ。文化人類学研究者。67 年頃からフィールドワークを始め、アジアやアフリカなど 85 ヶ国をまわる。71 年からアマゾン流域の調査を開始。帰国後、地元鶴岡市で国際理解と交流促進に尽力し、アマゾン民族館の館長を務めた。2005 年には鶴岡市市政功労者表彰を受ける。一般社団法人アマゾン資料館顧問。

(経歴)

1942：山形県鶴岡市に生まれる

1965：東京農業大学農業拓殖科卒業

フランスへ留学し醸造学、農業地理学を学ぶ

1971：在ペルー日本大使館付属学校赴任

1976：ブラジルの在ベレン日本総領事館付属学校赴任

1982：鶴岡市の自宅を改築し、アマゾン資料館開設

1991：東田川郡朝日村(現鶴岡市)にアマゾン自然館開館、館長就任

1994：鶴岡市にアマゾン民族館開館、館長就任

2019：一般社団法人アマゾン資料館設立、顧問に就任

山口考彦氏

1976 年ブラジル・ベレン市生まれ。アメリカへ留学し、コロラド大学で人類学を学ぶ。政策研究大学院大学の修士課程修了（修士）。青年海外協力隊や JICA などに所属し、国際協力に従事した。2019 年、父・吉彦が収集したアマゾンコレクションの保存活用を目的として、一般社団法人アマゾン資料館を立ち上げ、代表理事に就任。

(経歴)

1976：ブラジル・ベレン市に生まれる

1993：アメリカのゴールデン・ハイスクールに留学

1996：コロラド大学に入学し、人類学を専攻

2003：青年海外協力隊でパラオ共和国の国立博物館へ派遣

2006：JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所に勤務

2008：政策研究大学院大学入学（2010 年修了、修士）

2011：ユネスコ生涯教育機関でのインターンシップを経て、
国際協力機構（JICA）等に所属

2019：一般社団法人アマゾン資料館設立、代表理事に就任

展示について

今回は山口吉彦コレクションの中でも、楽器、装飾品、身近な生活道具を中心に展示を行った。資料の中には「編む」という技術が使われているものがあり、それぞれに編み方にも注目してもらいたい。

編む技術は世界に共通しており、日本にも多くの編物が存在する。京都産業大学附属中学・高等学校歴史部の生徒にはラタン(籐)によるカゴ作りのワークショップを体験してもらった。カゴは世界中で使用されてきた地域・時代にとらわれない普遍的な道具である。6 回にわたるクラブ活動の中で生徒たちはどのように感じたのか。製作したカゴも見えていただければ幸いである。

【展示解説】

・アマゾン・アマゾン盆地

アマゾン(アマゾン盆地)はアマゾン川流域のブラジル、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアにまたがる熱帯雨林地帯の総称である。

アマゾン熱帯雨林の動植物の種は非常に豊かであったが、近年は土地開発が一気に進められ、森林火災の多発も相まって原生林の大半が失われている。この原生林には淡水魚のピラルクーや大蛇のアナコンダなど、その類において世界最大級の生物が生息している。

(『日本大百科全書』小学館 参照)

・アマゾン川 [Rio Amazonas]

南アメリカのアンデス山脈から赤道付近を通って東流し、大西洋に注ぐ大河である。延長は 6300km であり、本流・支流はボリビア、エクアドル、コロンビア、ベネズエラ、ギアナ、ブラジルを通る。ペルー領内に本流上流部が通り、マラニョン川とウカヤリ川が合流してアマゾン川となる。下流域のブラジルではソリモンエス川がマナウスにてネグロ川と合流し、アマゾン川となる。マデイラ川、タパジョス川、シンゲー川など多くの支流が存在する。

(『日本大百科全書』小学館 参照)

・アマゾンに暮らす人々

アマゾン盆地に暮らす先住民は語族だけでもトゥピ・グアラニ、アラワク、カリブ、トゥカノ、パノ、タカナなどがあげられ、他にも分類されていない言語を話す集団もある。アマゾンに暮らす先住民の人々はインディオと呼称されている。

画像はアマゾン川支流、バカジャ川流域に住むシクリン族の集落(模型)である。シクリン族は複数の家族が同じ家に住み、川に一番近いカシケ(酋長)の家と 19 軒の家屋が広場を囲んで円形に建てられている。広場中央は村の会合や祝祭で使われ、その中

心には男性だけが出入りできる集会所がある。

(『日本大百科全書』小学館 参照)



・アニミズム

アニミズムとはラテン語で「霊魂」を意味する「anima」が語源である。アマゾン先住民の文化には根底にアニミズムが存在している。森や川、石などあらゆる「モノ」には精霊が宿っていると考えられ、その信仰のもとで儀式が執り行われる。

先住民社会には部族ごとにシャーマンが存在し、儀式や祭祀を取り仕切る。インディオが用いる楽器の中には精霊を呼ぶもの、精霊の音を表現するものが存在する。

(『日本大百科全書』小学館 参照)

資料について

資料①、② 踊り子の衣装 上着・スカート

ペルーのクスコで毎年の冬至の日に行われるインカの祭典、インティライミ(太陽の祭り)で着用する衣装である。インティとはインカ帝国(15～16 世紀)の太陽神のことである。



スカートには動植物の色鮮やかで
美しい刺繍が施されている

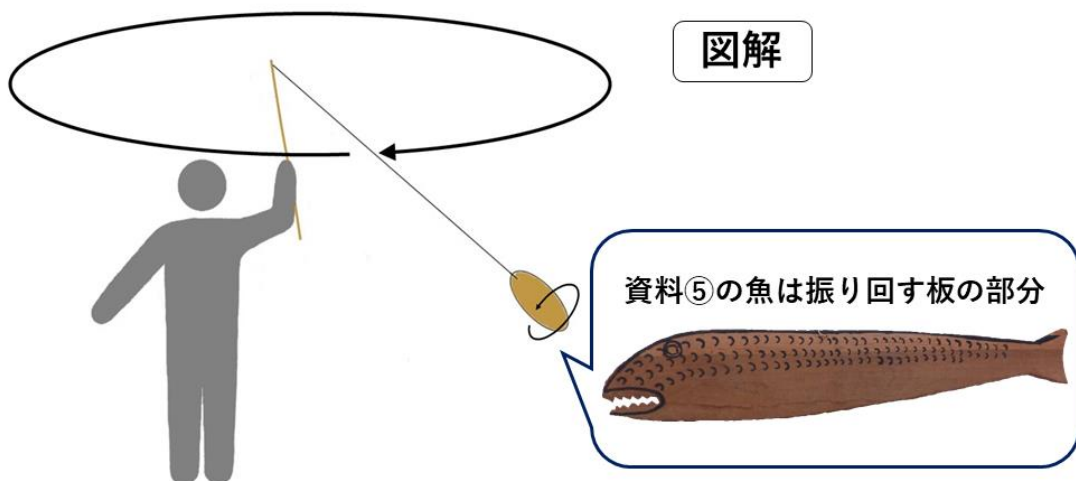
・中南米の楽器

中南米の楽器は、大別すると三つの大きな流れがある。先住民であるインディオの伝統的な楽器としては、笛や太鼓、マラカスがあげられる。弦楽器は15世紀末以降、ヨーロッパの征服者によって伝えられた。またアフリカからはビリンバウなど独特のリズムを持つ楽器が伝わってきた。これらの三つの文化が複雑に影響しあい、中南米には独特の新しい楽器が誕生した。

資料⑤、⑥ うなり板

うなり板(うなり木・ズニドール)はアフリカ、北米、南米、オセアニアなどで使われる楽器である。紐の一端を細長い板に、もう一端を木の棒に結び、空中で振り回して音を出す。

アマゾンの先住民はこの音が精霊を呼ぶ、または精霊をあらわすといい、回して豊漁を祈願する。



資料⑪ ヘコヘコ

ブラジル音楽で用いられる楽器で、グィロともいわれる。上部に溝が刻まれ、この部分をバチでこすったり、側部を叩いて音を出す。



資料⑫ ビリンバウ 資料⑬ カシシ

ビリンバウはアフリカ起源であり、ブラジルではダンス・格闘技のカポエイラでも用いられる伝統楽器である。木の弓に弦を一本張り、共鳴器に空洞のひょうたんが取り付けられている。右手に持つ木の棒で弦を叩き、ひょうたんの開口部を奏者の腹や胸に当てて音を大きく共振させる。また共に右手に持つカシシで、リズムを刻む。

資料⑭、⑮ 豆シェーカー

巨大な豆をサヤごと乾燥させ、振ることで音を奏でる。資料⑭はパカイという豆で、ペルーなどで食用としても用いられる。資料⑮は世界一大きな豆といわれるモダマ(藻玉)である。アフリカからアジアにかけての熱帯、亜熱帯で見られるつる性のマメ科常緑植物で、日本では屋久島から沖縄にかけてみることができる。

(環境省「いきものログ」HP 参照 URL <https://ikilog.biodic.go.jp/>)

・インディオのマラカス

アマゾン川流域のインディオが用いる楽器のひとつにマラカスがある。マそこには様々な素材が用いられ、形状も細長いものから丸いものと非常に種類が豊富である。素材によって奏でる音も異なり、目にも耳にも楽しい。

資料⑰、⑱、㉑、㉒、㉓、㉔ マラカス

アマゾンの先住民の間ではマラカスの音は精霊が奏でるものとされている。この音に合わせてシャーマンが踊る。

資料㉕ サンポーニャ

南米のアンデス地方で民族音楽に使用される管楽器である。葦の管を吹くパンパイプの一種であり、原材料には葦や竹のほか、近年はプラスチックなども用いられている。



資料㉖ キハーダ

ロバや馬の下あごの骨を乾燥させたもので、ペルー、ボリビアなど南米で 사용되는楽器である。ギロのように、骨の側面をバチでこすったり叩いたりして歯を揺らし、音を出す。

資料⑳ チャランゴ

ボリビア・ペルー南部、アルゼンチン北部のアンデス地域を中心に用いられる弦鳴楽器である。スペイン人がもたらした弦楽器がインディオ流に改変されたもので、ヨーロッパ文化と南米の文化が融合して生まれた楽器である。胴にアルマジロの甲羅が用いられるのが一般的であったが、ワシントン条約が制定(1975)されてからは木製が主流となっている。

(小学館『日本大百科全書』参照)



資料㉑ ゲンブリ 資料㉒ 亀の甲羅の弦楽器

ゲンブリは北アフリカのマロクコで民族音楽グナワに用いられる弦楽器である。展示資料は胴の部分が亀の甲羅からできている。



資料㉑

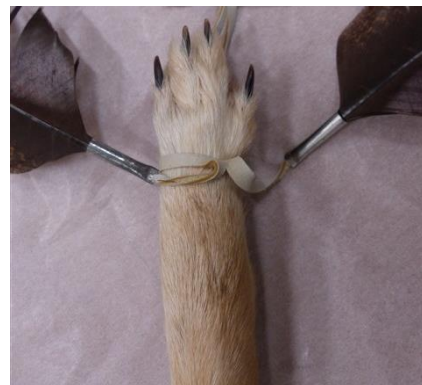


資料㉒

資料㉓

ラトルはマラカスのように振り音を出す楽器である。これは北米のシャーマン・メディシンマンにより、病気の治癒や降雨、悪霊の退散などに使用された。今日ではパウワウダンス(アメリカインディアンの踊りの祭り)の際に用いられている。

資料は亀の甲羅、鹿皮、ビーバーの毛皮、コヨーテの脚、ワイルドターキーの羽根からなる。



[地図]



・装身具

装身具にはアマゾンの森の植物、動物の牙や骨、魚の鱗など、様々な自然の素材が用いられている。鳥の羽毛が用いた装身具には、地位の高さや権力の強さを示すものがある。これらの装身具は日常的に身に着けるわけではなく、儀式を行う際に着飾るのである。

・編む技術

人類が「編む」ことを始めたのは旧石器時代であり、アメリカ合衆国や北欧の遺跡からはさまざまな出土遺物が発見されている。また日本では縄文時代前期から編物の存在が確認されている。

(小学館『日本大百科事典』参照)

・アマゾン川流域の編物

[カゴ]

ブラジルアマゾンに住むカネラ族が製作したカゴはフライパン型や家型などユニークな形をしたものがある。生活に結び付いた型を再現したのであろうか。フライパン型のカゴには緻密な編み目をみることができる。



資料④⑩

[マラカス]

ブラジルアマゾンに住むワイワイ族によって作られた編物のマラカスである。黒色で複雑な模様が編みこまれており、頂部と下部にあしらわれた赤と黒の鳥の羽毛が美しい。



資料④⑪